

ICHI no UNCHIKU

里山遊歩ー1 戸室山でカモシカに会う♪

2月の上旬のある日の昼下がり、親友のN氏からメールが届いた。「戸室山の頂上にいる。これから下ります」とある。しかも、頂上の標識の画像が添付されているではないか。

我々のような自然派は何かという高いところへ登りたがったり（一説によると「バカと煙突の煙は高いところへ登りだがる」ともいう）、陽気に誘われて後先も考えずついフラッと出かけてしまう。N氏いわく登山口を確認したかったので出かけたが、陽気に導かれてつい頂上まで登ってしまったのだそうだ。

N氏とは小中学校の同級生で、かねてから小学校6年生時に戸室山へ登った時のことが話題になっていた。しかし、どのルートをとったのか、どのような景観であったか、など全くと言ってよいほど記憶が欠落してしまっている。50余年の歳月とはこの様なものなのか。それともボケが始まったのか。このようなこともあって、つい先日N氏と回顧登山に出かけることにした。

さて、戸室山のことである。言うまでもなく、金沢市街地の中心から南東およそ8kmにある旧火山で、そのシンメトリーな山容は容易にそれと判る特徴をもっている。またその山麓には、里山林を有する小低丘陵が散在し、その間に水田が広がり、これを潤す多くのため池があって、これらが適当に広く混在して特有の景観を呈している。戸室山山麓の原風景とも言うべきで、景観が広く明るく、じつにのどかな風景で私にはとても好もしく思える。

戸室別所の集落を通り抜け、背後の畑地が広がる丘陵を過ぎて登山口に着く。この周辺は石垣を積み上げて千枚田のような水田をつくり耕作していたが、いまは苔むし崩壊寸前である。大きく左に巻くようにして登ると広い稜線にたどり着く。所々に大きな戸室石が散在し、その間をぬように登山道が続く。稜線は広く緩やかでナラ、クヌギなどの林で、木漏れ日がわずかな残雪に届いてまるで5月の残雪期の登山のようである。登山口から548mの頂上までは1時間くらいで行けるが、我々は急がない。あっちへ行ったり、こっちへ行ったり、座ったり、ひっくり返ったりで、どのくらいかかったのか。



順天倭城天守台儀大池から

全く知らなかったが、頂上から西に少し降りると、戸室権現と戸室大神が祭られている。ご神木とも思える大木が残り、苔むした石祠が二基あり一体は古色蒼然として、明らかにここに至る空間とは違う。医王山寺と深い関わり合いがあると思

われるが詳しくは知らない。権現と言うからには明治維新後の神仏分離令による廃仏毀釈にも関わって新たに戸室大神がつくられたのであろう。そんなことを空想しながら例によってコーヒーを沸かしている。と、その時N氏が突然、「カモシカだ」と叫んだ。びっくりして小生も顔を上げると、戸室権現石祠の背後にあるブナの大木脇にカモシカがじっとこちらをうかがっている。カモシカの習性である。一瞬、戸室権現の化身ではないかと思ったりして、身震いしてしまった。あわてて、写真を撮っているうち、豊かなお尻を我々に見せつけるようにしてゆっくりと林の中へ消えた。カモシカを見たのは何年ぶりだろうか。白山の中ノ川噴泉塔や蛇谷周辺でよく見たがそれ以来かもしれない。えらく感動してしまった。50年ぶりの登山であったが、金沢方面やキゴ山、医王山あるいは山麓の景観のほか、戸室山の歴史などにも目を向ける良い機会になった。それにしても、この陽気はどうなったのか。



by 市村 銑治

戸室権現脇にあらわれたカモシカ



2007/03
(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1166

石川県金沢市上若松町23番地

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

弥 生



五箇山 by shio

2007/03
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

私が金沢若人もれしやん塾に入りちようど一年がたちました。今回はこの1年間の中で、もっとも思い出に残っているイベントについてお話したいと思います。

私たちは昨年12月の下旬から1ヶ月間、金沢市広阪にある空き店舗を利用して小さなイベントを開催しました。このイベントは私がもれしやん塾に入り、最初から最後までつきっきりで参加した初めてのものになります。内容は伝統工芸士さんを講師としてお招きした講演会やものづくり体験です。計6回のイベントでは、企画をはじめ当日のスタッフ、司会進行役まですべてもれしやん塾生が務めました。イベントを企画するまでは、みんなで意見やアイデアを出し合いイベント開催を楽しみにしていました。イベントが近づくと、一般のお客さんを招いた運営に携わることが初めてだったので、順調に最後の日を迎えられるか不安にも感じていました。

私は備品管理と加賀野菜を使ったお菓子作り、司会進行役の3つを担当していました。この中でもイベントの最終日に司会進行役を務めたことが、一番印象深く残っています。まず初めに司会の原稿作りです。今まで原稿というものを作成したことがない私にとって、この原稿作りは第一の壁でした。しかし幸いにも私の司会担当日が最終日ということもあり、それまでの期



間、先輩にアドバイスをいただきながら作成でき、原稿は満足いくものを作ることができました。第二の壁は私の話下手です。私は人前で話すことが苦手です。だから司会当日の日はうまく司会進行ができるか、とても不安に感じていました。当日は何度か言葉を噛んでしまふなど、司会としては完ぺきなものではなかったのですが、そんな私に文句も言わず、最後まで聞いてくれたお客さんをはじめ、塾生のみんなの暖かさを身体で体験することができました。私にとって初めての事尽くしのイベントでしたが、これまでにないチャレンジをすることによって、たくさん得ることがあるということに気がつきました。今回、私は司会というものを通じて人の暖かさを実感し、自分もそういう暖かい人間になりたいなと思いました。このイベントを通じていろいろな人と出会い、いろいろなことを学びました。これからもこの経験を生かし、新しいことにチャレンジする気持ちを忘れず素敵な人間になりたいと思います。



【プロフィール】
金沢星稜大学 学生

濱のつばき 『騎馬戦』

かつて、小学校で運動会の花形種目のひとつは、騎馬戦だった。体が小さかったため、よく騎馬に跨る役となった。勝負は一瞬で決していたように記憶している。どうせ負けるなら、相手も引きずり下ろそうと殴られても何をされても決して相手を離さず、諸共に頭から地面に沈むことを繰り返していた。子どもながらに自らの弱さを認識した拳句に考え付いた、「それでも一方的には負けない」というまるで特攻隊のような弱者の戦法であった。

その騎馬戦もいまでは、種目から外れた学校がほとんどだという。残った学校でも、騎馬に乗った子がじゃんけんで勝敗を決するのだそうだ。これでも騎馬戦なのだそうである。

なぜ、じゃんけんになったか。近頃の親御さんは、子供に怪我をさせるなど要求するらしい。擦り傷一つ無い運動会にしたいらしい。中には靴を履いたまま騎馬に跨る子も居るらしく、馬の子の手が摺れるので先生が注意すると、親が「この子に裸足で土を踏ませるのか」とクレームがついたのでそうである。わが子の事は些細な事まで気づくが、その結果、周囲にどういふ影響が及ぶのかには思いが及ばない。親がそうなら、子もそうならざるを得まい。

人間の遺伝子と、チンパンジーの遺伝子は約99%が同じだったそうである。遺伝子情報的には、チンパンジーと人間は1%程度しか違わない。つま

り、人間といえども、ほとんど動物なのである。とすると、未熟なうちに色々な経験を積み、試練を経た方が生き残る知恵を蓄えられまいか。

現代の親御さんは、それを避けてますます生き残り困難な非動物的生き物を遺産として残そうとされているようである。

ご本人はご満悦かもしれないが、生きる力が萎え、周囲への影響に思いを致すことができない人々で満ちた社会が支払わなければならぬ総合的なコストは決して小さくはないだろう。動物社会にも悖る世になりはしまいか。

高校野球で肩に「文武両道」と記した学校が非難を浴びたという。武は戦いであり、非教育的だという主張なのだそうである。真の武とは、無為な戦いを避け、戦うより大きな成果を得ようと努力する道のことではなかったか。この大道を教えないから、逆に起こさぬでも良いつまらぬ暴力が増えているとは考えられないか。

大正末期から昭和初期、当時の日本は国際連盟を舞台に、多くの国際問題を対話で解決しようと飛び回っていたとNHKラジオで井上ひさし氏が語っていた。我々は戦後責任を果たしてきたのかと。

教育の本質が問い直されなければならない。誤った教育が、後世に莫大な負の遺産を置いていくことは、先の敗戦からも十分すぎるほど深く学んだはずでは無かっただろうか。

『会社に対する不満と将来に対する不安』

(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

最近20代の若手ビジネスマンと接する機会が多いのだが、彼らと話していて気づいた事がある。みんな会社に対して何がしかの不満を持っている。でもこれは、考えてみれば今に始まったことではない。僕も20代の時は、会社に対して不満を持っていた。僕の20代と違うのは、将来に対して漠然とした不安を持っているということだ。

僕がビジネスマンとして駆け出し始めたのは、第2次オイルショックの余韻をまだ幾分引っ張っていた1984年の事だった。その後円高不況となり、転じてバブル景気となった。そしてバブル景気が崩壊したのは30代の初頭の頃だった。振り返ってみると、バブル崩壊以降の長引く不況の中で、自分が属していた会社は本当に危機的な状況となった。しかし、不思議と転職しようという気にはならなかった。今この状況で抜けるわけには行かない。自分の手で何とかしようと思ったからだ。これは別に僕だけがそう思っていた訳ではない。周りのメンバーの殆どが同じように考えていた。もちろん会社に対する不満はあった。不満はあったが、この不満を理由にこの会社から抜け出す事はできないと思っていたのである。

一方将来に対しては、あまり難しいことを考えていなかった。だから不安をあまり感じなかった。今から思えば、バブル崩壊以降の不況が、これほど長引くとは思っていなかったからかもしれない。加えて、バブル経済という「いい思い」をしたことも、その理由となるのかもしれない。

今の20代のビジネスマンは、1979年以降に生まれている。彼らが物心つく頃といえば、高校入学以降だから1995年以降となる。バブル崩壊は1991年のことだから、彼らが物心ついたときには、日本は不況の真っ只中だった訳である。こんな中で、2000年のITバブルや、最近のいざなぎ景気越えといわれる好景気が到来したのである。しかし、今の20代のビジネスマンには、その余禄が与えられていない。好景気と言っても、給料が明確に増えている訳ではない。仕事が忙しくなっただけなのである。これでは不満と不安が増えるはずである。

会社に対する不満というものは、いつの時代でもついて回るものといえる。問題は将来に対する漠然とした不安ではないだろうか？この不安を払拭するにはどうすればいいのだろうか？安部内閣は、美しい日本という抽象的な理念で政策を示し始めたが、今ひとつである。もっと未来に明るい光を感じるために、何が必要なのだろうか？

20代のビジネスマンの未来像といえる40代のビジネスマン、即ち僕らの世代が生き活きと働いている姿を見せること。これは極めて重要なことではないかと最近切に感じるようになってきた。まずは、我々が空元気でもいいから生き活きすること。こんな事からやり始めるだと思った次第である。

『温泉への誘い 48 — 新潟の温泉 — 』

著者ご本人のご希望により、インターネット版ではご覧いただけません。

『民族と教育』

ナチュラルコンサルタント (株)

第1都市計画部 木内

昨今、メディアを賑わす社会問題に心が重くなる。ねつ造、改ざん、いじめ、教育者倫理や企業倫理の低下、凶悪犯罪の低年齢化など。模倣的連鎖はもとより、氷山の一角的に発覚が相次ぐことは日常茶飯事である。

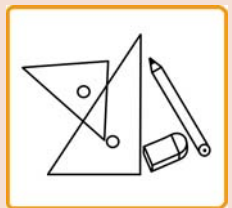
世界水準を誇った日本的知性と誇りはどこにいったのだろうか。一説では、日本人の祖先はユダヤ人であるという。精神学者フロイト、喜劇王チャップリン、物理学者アインシュタイン、音楽家ポールサイモン、監督スティーブンスピルバーグ、俳優ロバートデニロ。従来の手法に固執せず、革新的発想で全世界に影響を与えた著名人の多くはユダヤ人である。

ユダヤ的知性は、世界民族最高峰の知性を誇る。ユダヤ人の人口は1200万人と世界人口の0.3%に満たない。だが、ノーベル賞受賞者の民族別割合を見ると、経済部門65%、医学23%、物理22%、化学11%、文学7%と群を抜いている。

ユダヤ的知性のルーツには、流浪の民と称された迫害民族の歴史がある。世界を流浪するなかで頼れるものは個人の自信と力のみ。財産は有限だが、身に備えた知性は命ある限り無限で、身軽に携えて行ける。迫害の歴史のなかで鍛えられた精神こそが、優れた知性の土台となったのだろう。

イスラエルの教育にはテストが存在しない。テストがなくても教師は学生の理解度を図ることができるという。小生が幼少の頃は、今ほど教育者と子どもの距離は遠くなかったように思う。教育だけではない。様々な場面において、人と人との繋がり希薄さがあらゆる弊害を招いているのではないか。

ピント外れの教育基本法改正を興ずる暇があったら、真に次世代の人格形成を見据えた議論をと願う今日この頃である。



by M.Z

【アイスクリームと百工比照】

先日北陸中日新聞で、一人当たりの年間アイスクリーム消費量が石川県がダントツ日本一という記事を読み、「へえ、外の県ではそんなに食べていないの?」と少々意外な感想を持ったのですが、その記事によると和菓子の消費量も1位か2位だったような気がします。地元に住んでいる人間にとってはごく当たり前のことが、全国的に見れば特異な数値になっているんですね。そういえば、オーケストラアンサンブル金沢前音楽監督の故岩城宏之氏が「金沢駅ほど多くのいろいろな和菓子が選べるところはないよ。」と生前言っておられたことを思い出しました。こんな何気ない日常的な事柄に、加賀百万石の遺産を垣間見た気がしました。



とは申し上げましたが、実はこの「加賀百万石」という言葉、あまり好きになれません。金沢で仕事をしていると、やれ輪島塗だ、丸谷焼だ、加賀友禅だと過去の遺産に頼ったり、誇示しようとする地元新聞記事や広告が日ごろ目に付きすぎてうんざりするんです。まるで老舗の旅館の跡継ぎ息子が、やれうちは創業何十年とか、お宝はこんなのがあるとか客に見せびらかしているのを見ているようで鼻もちならないんです。

石川県が10年程前から進めている「石川新情報書府」というプロジェクトがあります。加賀前田家の五代藩主・前田綱紀公が全国各地から様々な工芸品や標本を集め「百工比照(ひゃっこうひしょう)」と呼ばれる一大コレクションを整備したことにヒントを得たプロジェクトで、これまで数々の文化遺産のデジタルアーカイブ化が進められてきました。もちろんこのこと自体大変有意義なものであることは誰も認めるところではありますが、私としては少々物足りない部分があります。それは「前田綱紀公が百工比照を始めようと思った本来の目的が何であったか?」という部分です。綱紀公は単なる一大コレクションを道楽や人に見せびらかす為に行ったのではなく、『新しい産業の創出』の為に行ったのではなかったのか?という部分です。デジタル化技術やコンテンツ作成技術の産業育成には確かに役立ちますが、せっかく過去の遺産をデジタル化しても、それはデジタル版の博物館や美術館を造ったのと本質的には変わりません。綱紀公に言わせれば、デジタルアーカイブ化作業はあくまで目的を達成する手段であつたはずで、本来の目的ではなかったはずです。

お隣富山県の高岡では今まで商品になるとは全く考えられなかった漆芸の製作工程段階素材の見本プレート約150種類を展示「HiHi!!! (ハイヒル)」という新商品ブランドで売り出し、既に大手キッチンメーカーとの技術提携を行っているそうです。そろそろ加賀百万石も過去の工芸遺産の新産業分野への応用に本格的に取り組む時期ではないでしょうか。

第五十一章(道生之、徳畜之、物形之、器成之)

道生之、徳畜之、物形之、器成之。是以萬物、莫不尊道而貴徳。道之尊、徳之貴、夫莫之命、而常自然。故道生之、徳畜之、長之育之、亭之毒之、養之覆之。生而不有、爲而不恃、長而不宰。是謂玄德。

政治という場所で議員が有権者にその手腕を発揮します。

学校という場所で教員が生徒にその思いを伝えます。

家族という場所で親が子にその愛情を注ぎます。

同じように、都市、地方という場所で都市および地方計画を担うプランナーは地域住民に夢を与えなければなりません。

ただし、その夢は直接的に地域住民に示されるわけではなく、地方自治体の「モノ」として示されることとなります。

最近ではワークショップなどプランナーと地域住民が直接交流しながら計画を進めていくケースも増えてきたようにも思いますが、それでも圧倒的にプランナーは地方自治体の背後にいる受託者にすぎません。

さらに「総合計画」「都市計画」分野は地域住民の視線を離れ、バードアイ的な観点から都市や地方を観て、様々な地区指定や事業を提案する技術を持つ必要があります。

地域住民の顔が見えない状況で地方自治体からの受託者という立場で業務をこなしていくのですが、アンケートやヒアリングなどの地域住民の声を吸い上げる手法は用いるものの、「本音」を感じる場面にはほとんど出会うことがありません。

これは、地域住民に様々な思いがあつたとしても、人前ではどうしても「知患者」「紳士」を演じてしまい、それが漏れてこないからです。

しかし、地方自治体が行う施策などに対して、地

域住民の満足度、期待度が重要な評価となっている現代においては、地方自治体の職員、アンケート結果などの紙、地域の代表者の声からその背後にある一般者の「本音」を感じなければなりません。

では、地域住民に会うことも、情報を漏らすこともできない状況下で、地域住民の「本音」を感じ、計画に反映させ、満足度・期待度が高い計画としていくことが、どうやったら可能なのでしょうか。

「美は芸術であるが、芸術が美であるわけではない。芸術とは心をゆさぶるものである。」
「芸術は創造した芸術家の人生観の作品化」と私の記憶にこの言葉が残されているのですが、誰の言葉か、いつの頃の言葉なのか、日本なのか外国なのかも忘れてしまいました。

それはさておき、この両方の言葉を合わせてみると「技術・知識を表現することは計画であるが、計画が知識という技術だけであるわけではない。計画は人生観の結晶である。」

前述したように、プランナーにはバードアイが技術として必要なのですが、これと同時に、アリの目、言うなれば「市民としての人生観」を持ち続けながら「夢」を示さなければ「満足度・期待度が高い計画」にいたる可能性はないということだと思えます。

だからこそ、職場という場所で経験者が未経験者に教えられることは知識・技術が精一杯であり、「計画づくり」まで教えることはできないのです。

未経験者には是非とも経験者の「計画に結びつく人生観」を見抜いてほしいと思えます。

by shio

